

# 山と博物館

第32巻 第1号

1987年1月25日

大町山岳博物館



古代人によって集められた石 (来見原遺跡S61.10. 撮影 島田哲男)

## 古代人によって集められた石

遺跡の発掘調査をすると拳大から人頭大の石をいくつも集めた「集石」と呼ぶ遺構が、時として古くは一万年以上前の旧石器時代から、新しくは近世、近代の遺跡で時代を問わず見られます。これら集石の用途は時と場合によりそれぞれ調理場、祭りの場、お墓などとその有り方で判断されます。しかし、旧石器時代、縄文時代草創期、早期の集石を除く多くの場合は、祭祀の意味の強い遺構と考えられています。その代表としては、市内上原遺跡や諏訪郡原村阿久遺跡の集石群があげられます。

この様な集石が昨年発掘調査した大町市三日町の来見原遺跡でも古墳時代後期(約一五〇〇年前)層と弥生時代中期(約二〇〇〇年前)層(写真)の2層に発見されました。古墳時代、弥生時代両者のものとも地形に沿って帯状に積み重ねられたもの、単位的に楕円形に近い形に積み重ねられたものの2種類の形態が見られました。集石の下部はほとんどのが浅く掘り凹められたもので、下に穴が掘られてあったものは古墳時代の集石に一基見られたのみで、下に物とか人を埋めたという感じのするものはひとつも見られず、墓という線はないと考えられます。さて、それではこれは何であったかと考えますと「わからない」というのが正直なところです。ただ集石の間や周辺より、丹のついた石や土器、御神酒をあげたと思われる形の土器等が出土していることから祭祀的な線が強いものと考えられます。祭祀的と思うと、これら集められた石のひとつひとつには古代人の願いが込められているのではないかと感じられます。

しかし、このように集められた石「集石」は、生活的施設(調理場や炉等)、祭祀的施設(祭り場や墓等)、そして時によって自然のいたずらの場合もあり私達の頭を悩ませます。

(島田哲男)

# 大町市三日町来見原遺跡概略

島田 哲男

昨年四月から一月まで来見原遺跡の発掘調査がおこなわれました。来見原遺跡は、大町市三日町、中山山地山麓の居谷里沢が形成した小扇状地上約一万㎡に広がる縄文時代から中世に渡る遺跡で、一九七八年に北端一〇〇〇㎡が調査され、二次目の今回は南端二五〇〇㎡を調査しました。

今回の調査地区内は、市内で現在までに調査した遺跡の中でも地層とその年代区分が良好に対比できるものでした(図1)。これは居谷里沢が形成した扇状地上という堆積がはつきりした条件と、堆積土層中にそれぞれ時代の遺物(生活遺物)である土器・石器などを含んでいる土層のことが確認できるという条件が重なり、図1のごとく現代から縄文時代晩期、約二二〇〇年間の地層が約二mという深さまでその順番に区別でき、時代

ごとに生活した地面を確認できたからです。土層の中で確認できた生活層は古いところから縄文時代晩期後半(約二二〇〇年前)、弥生時代中期(約二〇〇〇〜一九〇〇年前)、古墳時代中・後期(約一五〇〇〜一四〇〇年前)、奈良・平安時代(約一三〇〇〜九〇〇年前)、中近世の室町時代(約五〇〇年前)の五期間でした。また、土層を見ていくと弥生時代中期層と古墳時代中期層の間に約六〇cmの遺物がほとんど見られない砂礫層が見られることから、この間約四〇〇年は相当の氾濫があったと考えられます。そしてこの層の中において河川跡も確認できました。それは、確認された各時代の生活層を見ていきたいと思います。

**中近世・室町時代**  
この層は現地面から約三〇cm下で確認されました。ここからは建物の柱を建てたと思われる穴が多く検出され、また柵と思われる柱穴も見られました。遺物としては中国から輸入された青磁、白磁の茶碗、瀬戸地方で作られた陶器の皿や茶碗、素焼きの皿、刀子、鉄の失じりなどが出土しました。

ここに出土した遺構・遺物は、おそらく天正一五年(一五八七年)の譜代家老溝口貞秀か、浅野久衛門尉所有の領地を檢地し、その年貢を定めた浅野久衛門尉御恩の檢地帳の中に借馬之内、胡桃原(来見原の旧地名)、大さ、(大笹の旧地名)が見られ、調査区が来見原遺跡の範囲の中でも大笹地籍に入るので、前者検地帳の大きさに関係したものと考えられます。

### 奈良・平安時代

この層の中では、奈良時代住居跡一軒、平安時代後半住居跡一軒、竪穴一基、集石一基が検出されました。遺物としては、一般雑器として使用されていた土師器・須恵器・灰釉陶器の他に、炭化木製品、字を書いたり、刻んだ土器がありました。炭化木製品として



図2 遺跡全景

は、髪を梳す櫛破片、蓄を敲く砧と呼ばれる木槌、何であるのかははっきりしないが竹を細く割き丸めた曲物がありました。木製品というのは普通は腐ってしまうのがあたりまえですが、これらは、火にあつて炭化し、それが灰になってしまいう前に蒸し焼き状態となったので残ったと考えられます。この中で櫛は一般庶民の家から出土する例は大変にめずらしいことです。

字が書かれたり、刻まれた土器は、三軒の住居跡から発見されました。字を書いてあるものは、墨を使用し、土器の腹面や底に書いたもので、刻んだものは釘の様に尖ったものを使用し刻んだものです。文字の種類としては、「胤」「主」が主体で、中には現在解読中ですが土器の腹面、底面のそこらじゅうに文字を書いた土器も見られます。文字の書かれたり、刻まれた土器の種類はすべて杯と呼ぶ現在の茶碗のみでした。これら文字入りの土器が出土したということは、当時一般庶民はあまり字が書けなかったと思われることから、この字を書いた人は村の中の物知り、知識人



図3 中世の建物跡(丸い穴が柱穴)

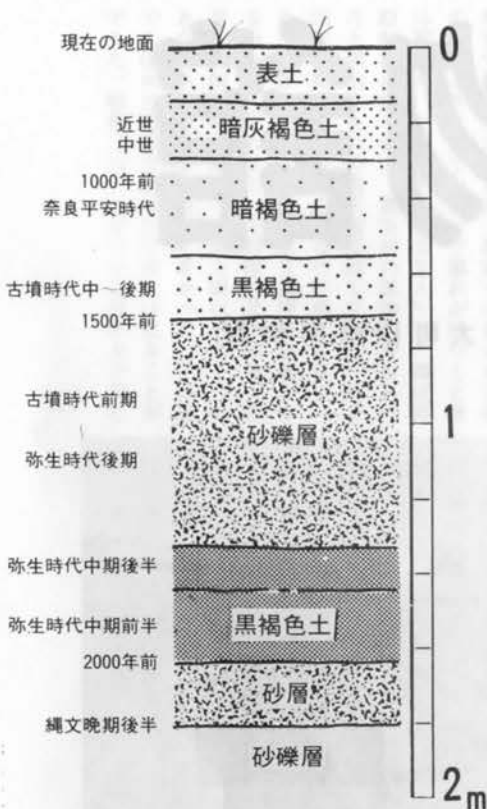


図1 来見原遺跡の土層概略図

であったと考えられます。

この他に興味をひいたのは、住居跡一軒中九軒が火災にあった住居だったこと、しかもこの火災は不注意や自然災害で出火したのではないらしく、すべて故意に火をつけ家を燃やしたと考えられることです。これは、これら火災にあつて居る住居のカマドが壊されていたり、カマドの中に使用していた土器を詰め込んだりしていることから判断されます。このことから、住居を使用し、住むのをやめた時にカマドを壊したり、使用していた土器をカマドに詰め込んだりして、家に火をかけ燃やす風習があつたものと考えられます。

もうひとつ興味をひくことは、カマドの位置で、半数以上の家のカマドが南側にあることです。市内で調査したカマドをもつ住居のほとんどは北側か東側に造られていましたが、本遺跡の場合は、南側に造られているものが調査した住居の半数にあるわけで、おそらく風向きの関係と思われれますが、市内でもめずらしい事例です。

古墳時代中～後期

この層からは、住居跡一軒と集石群が検出されました。この時期で注目されるのは集石群で、人頭犬、拳大の石が長さ約一〇m、幅一・五mの帯状に並べた集石一ヶ所、一〜二mの不整楕円形や不整形に並べられた集石七〜八ヶ所が約三〇mの範囲に固まっています。集石群の集石の中や周辺には、土師器の甕が三個体とまて出土している地点も見られ、またお供え物を盛つたと考えられる在神社などで使用されている三方と呼ばれる道具と同じ用途である土師器の高杯が普通の遺跡より数多く出土していること、現在の徳利と同じ用途で普通の遺跡ではあまり出土せ



図4 石臼を伴う集石(左上の皿状の石が石臼)

ず、古墳のようなお墓に通常見られる須恵器の跡(はぞう)が四個出土しています。これらのことから表紙でも述べましたが、この集石は祭祀の性格が強いと考えられます。さて、祭祀的とするならばどの様な祭祀であつたのでしょうか。これには二つが考えられます。一つは、近くに墓である古墳があることからそれに関連した祭祀、また一つは、農地である水田が存在したと予想される場所に近いことから農耕祭祀に関連したものであるという考え方があります。

弥生時代中期

この時代の調査は、大北地方において初めてのもので、弥生時代といえ、日本で米作りが始まった時代であり、大北地方での米作りの始まりを知る初めての調査でもあります。期待どおり、水田は確認できなかったものの、土器の器面に板の跡がついたものが何点か見つかり、長野県内で米作りが始まったのが弥生時代中期頃ですから、大北地方におい

てもほぼ同時期から始まっている確証を得ることができました。

この層からは、集石群と遺物の廃棄場が一緒になって検出されました。集石群は表紙に前述したごとく、一〇mに渡り帯状に続く集石、石皿と呼ばれる石臼を組み合わせた集石(図4)焼土、炭を伴う集石(図5)などが見られました。集石周辺からは、赤色の丹の付着した石、丹が塗られた土器、酒器に使用したと考えられる形が変わった異形土器などが出土しており祭祀の性格が強いと考えられます。どのような祭祀であるのかはつきりとしませんが、おそらく、場所が低地にあることなどを考え合わせると、米作りが始まっており水田に近い位置と予想されることから農耕祭祀に関連したものと考えられます。

集石と一緒に検出された遺物の廃棄場は字のごとく遺物を廃棄する場所、現在のゴミ捨て場です。しかしそれが祭祀関係と考えるならば、単なるゴミ捨て場であつたとは考えられません。おそらく、この当時の集

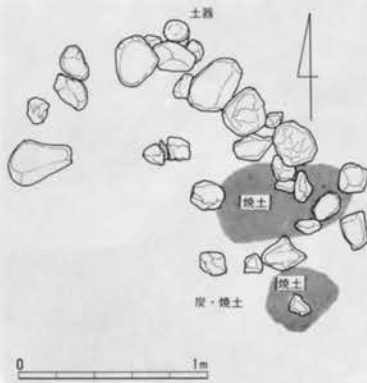


図5 焼土を伴う集石実測図

まため  
来見原遺跡は当初の予想を上回る遺跡で、何層にも重複した人々の移り変わりを知る上では大変に良好な遺跡でした。今後、現地調査をしてきた資料を整理していくとまだまだ色々なことがわかってくると思われれます。  
(大町市教育委員会)



図6 左 集石から出土した壺 右 異形土器

# 昔の精白・製粉と食品

## —北アルプス山麓地方の食生活(2)—

青木 治

穀物や野菜を取獲すれば、農家では必ず精白製粉し、手で加工し、すい飯あるいは煮物、焼物、浸物、茹物、漬物などとし朝夕の食膳を豊かにする。

穀類の精白や精粉は、昔は主として、水車か「がつたり」(ばつたり)が使われた。小川の水力を利用し、水車を回し、木製の大きな歯車様の枠受けで、枠を上下に動かす仕組みで玄米を搗いて白米にしたり、そのほか稗・粟・黍の精白にも使用していた。粉は多くは手挽きの石臼で挽いたが、水車利用の石臼利用も多かった。車屋内に大きな石臼に木製の大歯の横歯車を取付け、水車の縦歯車と噛み合わせ、臼を回して粉にする。粉には米粉・稗粉・そば粉・黍粉・小麦粉などがあるが、何れも箱師にかけて、夾雑物を取除く。中でも小麦粉は箱師(てこてん)にかけて、麩と粉を分けるのであるが、農家では昔から主婦の仕事ときまっていた。夕暮れが近づくと昔は箱師の「てこてん・てこてん」と、隣近所数軒から響く音は、農山村の風物詩でもあったと明治生まれの老人達は話していた。尚手臼での粉挽きも主婦の夕なべ仕事とされていた。「がつたり」は水車より簡便で水量が少なくないところでも使え、佐野坂以北の白馬、小谷、東部山地の美麻、八坂方面にも多く、小さな沢利用の「がつたり」が多かった。平坦地でも僅かの水量で済むので少しは見ることができた。昭和二六、七年の小谷村中土で見た

がつたりは、米など持運びのよい道ばたに、うまく沢水を利用して建てられ、終日のぎつたりばつたりは如何にも閑静な山村風景でもあった。

江戸時代では百姓は「しげればしげる程味がでる」とか、「むさ(腹一杯)と食すべからず」とかいつて、松本藩支配下のこの地方でも、本税(物成・土地税で扱われる)は四公六民か五公五民であったようである。雑税(小物成)としては、稗・油荏の定納、楮役・蠟役(蠟をとる)・鳥糞役・栗役・綿手役等百姓の生産品、それに大工役・鍛冶役・伯楽役の労役は「しげればしげる程」の筆法で中々重かった。稗・油荏以下の農家の生産品への課税も百姓はむさ食すべからずの筆法でやられたから、満足にいく食生活もできなかった。その上新税の運上もあらわれた。例えば車屋を造って穀物の精白製粉をすれば車屋運上が課税され、車屋も藩の統制下におかれた。

こういう中で農家は知恵をしぼり食生活充実のため幾多食品を考えだした。糯米は、白餅の外に、黒大豆を混ぜた豆餅、粟・糯黍を混ぜた粟餅・黍餅、もちぐさ・ちちつこ・山ごぼうの葉を混ぜた青餅、糝粉を利用した粉餅・枳餅等種類が多い。寒水に漬けて凍らせた氷餅、同様にして凍らせた粉餅は保存食として利用が高かった。米粉の寒さらしは夏でも虫がつかなく使える。稗粉(ひい



車屋小屋(水車風景) 大町市鹿島にて

## 博物館だより

資料寄贈ありがとうございます

- スキ1他3点 横浜市中央区上野町 尾上忠蔵
- スキ1他3点 大町市下白塩町 黒岩俊夫
- K2山頂の岩石 1点 東京高輪 山崎安治
- 百瀬慎太郎の色紙 1点 鎌倉市寺分 井垣美和

- 河野齡蔵の名刺 1点 東筑摩郡四賀村 横内きよ
- 写真 5点 上田市中央 柴崎高陽
- 書籍「登山医学」 1点 北安曇郡松川村 村木紘二
- 書籍 40点 大町市大黒町 遠藤好一
- キノコ類 2点 松本市並柳 清沢由之
- 1点 大町市借馬岡地 大野晴吉
- 1点 大町市神楽町 林 一美
- サンガイ笠 1点 大町市三日町年番
- 文机他 7点 大町市俵町 細川紀道
- 嫁提灯他 1点 大町市八日町 仁科元彦
- 電燈用笠 1点 大町市下白塩町 黒岩俊夫
- 代車 1点 大町市常盤上一 小沢三七夫
- 提灯製作用具 20点 大町市九日町 高橋一義
- 縄綱 5点 大町市平青木 西沢聖賢
- 自在鉤他 6点 大町市常盤泉 奥原 清
- 一斗拵他 4点 東京都日野市 清水新一郎
- クレツテルシユーズ 1点 松本市女鳥羽 深澤信子

じやの粉)は、佐野以北では米の上ののせて焚き糰飯としたし、菜飯・大根飯・粟飯、黍飯も米節約のための工夫飯と考えられる。晴の食には、ごもく飯・粟飯・きのこ飯・小豆飯・糯米と赤小豆の赤飯がある。尚大麦は碾割って割飯にしたが、これは常食。黄粉むすび・胡麻むすびは田植に、味噌・梅漬あんのみずびは遠足に、小麦粉はうどん・すいとんに、米粉は汁わかしに、そば粉はそばに、小麦粉・糝粉の味噌に野菜餡の焼餅灰ころばし何れも地粉であれば珍重される。黄粉・小豆餡をつけたおはぎ、何れも故郷の香り高い味である。

大町山岳博物館嘱託  
穂高町郷土資料館長

**山と博物館第32巻第1号**

発行所 長野県大町市 TEL220-211  
一九八七年一月二十五日発行

印刷所 長野県大町市後町 大町山岳博物館

定価 年額一、二〇〇円(送料共)切手不可  
郵便振替口座番号長野四一三二九九二